

---

# 短編小説集

自分不器用ですから

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短編小説集

### 【Nコード】

N3860Z

### 【作者名】

自分不器用ですから

### 【あらすじ】

その名の通り短編小説置き場です。たまに息抜きで描く程度ですがZZZ

おかしくし。

圭輔「なあ、律」

律「ん？なんだよ、遠藤」

圭輔「付き合ってくれないか？」

律「どこに？」

圭輔「そうじゃねえつつうの、俺の彼女になってくれって事」

律「な、なぐに言っちゃってんだよ、お前・・・！冗談は休み休み・・・じゃないか？」

そういつて顔を赤らめながら髪をいじりだす律。黙って背中を合わせる圭輔。

律「お前みたいに音楽出来て料理出来て皆から好かれてる奴がわたしみたいに女つぽ

くもなく可愛くない奴を好きになんか・・・おかしくし・・・  
(照)

圭輔「・・・おかしくねえし。マジで可愛いけど？」

そういつて律を自分の方に向けて笑いかけながら2人の距離は本当に至近距離になる。

律「本気・・・かよ?」

圭輔「お前といたら毎日飽きないし、俺が楽しい毎日、送れる自信あるぞ」

お互いの顔と顔が至近距離のまま会話を続ける。相手の息遣いまで聞こえる距離だ。

律「お前ばつか楽しいのかよ。わたしはどうなんだ?」

圭輔「お前が笑ってないのに俺が笑うわけないだろ?俺が笑ってたらお前も笑ってる」

律「・・・後からいやだって言ってもわたしは絶対、逃がさないからな」

圭輔「上等」

そして律は自分から圭輔に身体を預けて自分を好きと言った少年を受け入れた。

律「けいすけ」

・  
・  
・  
・

圭輔「どわっ!?律、お前は学校で抱き着くなとあれほど言っただろっが」

律「いいじゃん、もう学校公認なんだし、いつでもベツタリしたいんだよ」

漣「いや、暑い、暑い。ここだけ真夏だな」

唯「漣ちゃん、今、冬だよ?」

梓「いえ、唯先輩。比喩表現で実際に夏というわけでは……」

紬「ふふっ、2人はとつても仲いいもんね」

圭輔の告白から1年後、高校二年になった2人は軽音部のメンバーも呆れるくらいに甘々なバカカップルになっていて圭輔もベツタリな律を注意はするのだが結局は受け入れてしまい、傍から見ても恥ずかしくなるような熱愛ぶりだった。

漣「確かにな」。学園祭ライブで公衆の面前でキスしちゃったもんな(照)

思い出した漣の方が恥ずかしくなったようで顔を赤くしている。

梓「2人みたいなのをバカカップルというんでしょうか」

律「バカカップルでもいいもん。いつだってラブラブだかな、わたしら」

圭輔「どうにもこの押しに弱いは、俺って……(汗)」

唯「圭ちゃん、りっちゃんに亭主関白されてそうだね」

紬「唯ちゃん、りっちゃんはこの場合、お嫁さんだから亭主関白は違うわ(汗)」

環境はあまり変わっていない。いつもの仲間がいて馬鹿をやったり、音楽をしたり、遊んだりだ。だけど律と圭輔の関係はとても親密で甘い仲に変わっている。

律「圭輔、今日も帰りに寄って行っていいよな？」

圭輔「ダメって言うてもお前は乗り込んでくるだろ、律？」

律「もちろ」

圭輔「はあ〜・・・了解」

一同「完全に尻にしかれてる」

見たまんま主導権は律で圭輔はそんな彼女に引っ張られっ放しな毎日なのである。

・  
・  
・  
・

律「おじやましま〜っす!」

圭輔「はい、どござ」

予告どおりに家にやってきた律と圭輔。いつものように彼の部屋にやってくる。彼のベッドにダイブしてそのまま顔を埋めながら大きく背伸びをする。動きすぎてスカートの中が見えそうなので圭輔は顔を背けて部屋の一角にカーテンで作った着衣場所で制服を脱いでセーターにズボンを着て出ると律が手招きする。

圭輔「お前な、あんまり人の布団で暴れるな、シーツにしわがよりまく。・・・」

律「それっ!」

圭輔「うおっ!?!」

いきなり腕を両手で引かれたのでバランスを崩した圭輔はそのまま律に伸しかかる  
ような形になってそのまま律がぎゅゅと抱きしめて幸せそうな顔になる。

圭輔「いつもいきなりだな、律(汗)」

律「へへっ　いつもの事だろ?それとも抱き合っのって嫌?」

圭輔「寧ろ好きだけだな。律って抱き心地いいしさ・・・ん」

今度は律を圭輔が抱きしめる格好になり、すっぽりと腕の中に律は収まっている。

律「・・・へへっ・・・」

圭輔「あははっ……」

顔を合わせて笑い合う2人。ただただ幸せだった、この時間を共有できることが。

律「圭輔……キス」

圭輔「はいよ」

律「んんっ……んうっ……っ」

さつきよりも強く抱きしめて少し彼の肌に爪がたつくくらいにぎゅっ  
と触れ合う律。もう

盲目なまでにどっぷりと恋の麻薬に浸かってそれなしには生きてい  
けなくなっている。

圭輔「んっ……はっ……なあ、律」

律「ん？」

圭輔「髪、下ろしていいか？」

律「髪？べ、別にいいけど……変だぞ、わたしがバンド外すと」

圭輔「ずっと付き合っただけキスとか、もっと深く繋がったりしたけど  
まだ律が髪下ろした」

ところって見た事ないなっと思ってさ、見てみたくなった」

そういつて圭輔は律が前髪をまとめているヘアバンドを外す。さら



さらな髪が下りてい  
つもと髪型が違つとかなり雰囲気が変わっていた。

律「ど、どうかな？変だろ、やっぱり」

圭輔「……………」

律「どうしたんだ、圭輔？」

ぽかんとした顔で固まっている圭輔を不安そうに見つめる律。

圭輔「（か、可愛ゆっ！？何かいつもよりさらに律が可愛い……！）  
」

やはりメンバーが言うとおり圭輔も大概にバカップルだったようだ。

律「や、やっぱりわたしは前の髪型の方が合ってるよ。こんなの……  
おかしくし（照）」

なんとなくその言葉を言った律が前の彼女と被って思出す。告白  
した時もこう言っ  
て自分の事を下に見ていて今でもこういう癖があるのだが心底、思  
うのは自分が彼女  
にどっぷりと心酔したのはこういつ時折見せる凶悪なまでの可愛さ  
なのかもしれない。

圭輔「……………おかしくね〜し。今の律、すっげえ可愛い。もっと惚  
れた」

腕の中に納まって抱き着きながら自分を上目遣いに見つめる愛おし

い人に自分の率直  
な想いを伝える。というよりどんな律も圭輔には可愛いのである  
が。

律「・・・ならば、もっと惚れた今ならいつもよりもっと問答無用  
で愛してくれる?」

圭輔「勿論。ってお前、今日は遅くなっていいの?」

律「怒られてもいいさ、それより・・・きてよ、圭輔」

圭輔「・・・はいよ」

そういつて2人はまた幾度目かの親密にそして深く繋がり合った。

・  
・  
・  
・

律「けいすけ〜!起きろ〜!もう朝だぞ、朝ご飯冷めちゃうぞ〜  
!」

圭輔「・・・んっ?ああ・・・もう朝か」

なんとも懐かしい夢を見ていた圭輔が目を覚ますと目の前にいたの  
は髪をポニー

テールにして前髪を下ろした髪型にしている最愛の人、律だった。

律「早く着替えてきてよ?あ・な・た」

そういつておはよふのキスをされる。これはすでに日課だった。

圭輔「○○、おはよう」

○○「あうあう！ぱぱ」

あれから高校を卒業して圭輔はメジャーデビューをしていた。もちろん律や唯達と一緒に。HTTとしてなのだが律はしばらく休んでいた。というのも圭輔と律には子供が出来て産休と言う形で律抜きでしばらく活動していたのだ。

圭輔「でもまあ、これでお前もやっとバンドに復活出来るな」

律「あの、その事なんだけどね。たぶん、今年の終わりごろまた休むことになるかも」

圭輔「ん？」

律「できちゃった・・・」

圭輔「・・・へっ？」

律「出来ちゃったんだよ、2人目の赤ちゃん・・・」(照)

固まる圭輔。そして持っていた箸を落とした直後に。

圭輔「マジか、律！？い、いつから・・・というか、何か月だ！？」

律「まだ2か月・・・たぶん、前に・・・した時だと思う。あれからしてないし」

賑やかだった家庭にまた家族が増える。驚いたが2人にとって嬉しいニュースである。

律「あつ、そうだ！なんなら前に言った、あれ実現させてみるか？」

圭輔「なんだよ、前に言ったのって」

律「子供達でバンド組ませるって笑い話、本当にそれぐらい大家族にしたいな」

圭輔「……っ!?!?……ははっ！お前って本当に飽きないな、やっぱ」

そういつて律を引き寄せてすでに分かっていたように律も顔を上げて彼を受け入れる。

律「これからもがんばってよ、旦那様」

圭輔「任せるよ、しっかり支えて見せるさ、律」

頑張る以外に何かあるというのかと圭輔は想う。

こんなに好きで愛しい人が笑顔になれるならどんな事だって頑張ってみせるとそう誓う。

律「後、子供もがんばろうね」

圭輔「うっ……善処します……」

やっぱり律には引つ張られっ放しで今も変わらない圭輔。だがあの

頃から変わらない

事、それはやっぱり彼女といれば未来永劫、幸せしかない。

これからも律と圭輔は共に笑い、共に泣いて2人でずっと支え合い、生きていく。

永久の愛を誓い合って。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3860z/>

---

短編小説集

2011年12月13日02時02分発行